【横浜ダンスコレクション EX2013　Competition　II　総評】

現代のダンスは、限りなく野性に近づき霊感が降りてくるような極地から、一社会人の「踊る歓び」の表現まで、振り幅は広くていい。経験もアイデアも未知数の若手振付家に期待するのは、個人の限られた領域にとどまらず、全方位的に好奇心と感度を研ぎ澄ませ、観る人の心身を揺り動かしてみせることだ。

住吉　智恵　（アートプロデューサー・ライター）

コンペティションⅡも３年目となり、参加者の表現スタイルの幅もますます広がり、今回も見応えがあるコンペティションでした。
応募者や参加者のみなさんの熱意がひしひしと伝わってきました。総じて構成やテクニックも回を重ねるごとに洗練されてきたと思いますが、ややもすると複雑な構成や細かいきっかけにとらわれて身体で表現すべき核心が十分に出さないままといったケースも見受けられました。
コンペティションⅠの室伏鴻審査員が言及されたような「ダンスにおける野性」を、コンペティションⅡの世代だからこそ、よりいっそう発揮してもらえれば、今後さらにコンペティションも盛り上がることでしょう。
また熱心な自己探求も重要ですが、モチーフをもっと外に求める、そんな広がりがあってもいいのではないでしょうか。そのためにも本を読む、他の表現ジャンルに触れる、広く社会に取材する、といったことにより積極的になって、コンペティションⅡ世代ならではの新しい解釈を見せていただきたいと思います。

立石　和浩　（雑誌編集者）

優劣つけがたい作品が並び、これまで以上に審査は難航した。
会場は天井も低く、四方を柱に囲まれた何もない空間。
振付自体の面白さにも関わらず、この空間をうまく使いこなせなかった作品がいくつか見られたのは残念。
動きのさらなる探究と同時に、身体と空間の関係性にももっと意識を向けてほしい。
升水絵里香「カクシンハン」は、シューベルトの「野薔薇」を変奏する冒頭から一転、後半ではひたすら元気に踊りまくる構成もよかった。升水と米田沙織２人の個性の違いが振付にもよく生かされ、ダンスの楽しさを感じさせてくれる。
白井愛咲「HUM」は、軽妙な手さばきで言葉の意味分節機能を二重三重に攪乱していくその手法が面白い。
松田鼓童「いつものこと」は、とにかく楽しい。見る者をぎょっとさせる仕掛けをいくつも用意して笑わせる構成が巧みだった。

浜野　文雄　（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

YOKOHAMA DANCE COLLECTION EX 2013